

## 認定証

## 様

あなたに記録  
つよさ (ボールの速さ)  
わざ (コントロール)  
さばき (走るスピード)

愛知県立内海高等学校野球部



「親子でグラウンドキャッチボール教室」  
の認定証=いすれも山下博史監督提供

▲昨年2月に開かれたグラウンドキャッチボール教室。内海高校の野球部員が講師を務めた

マネジャー2人を含めて12人。同町出身で今年で就任7年目の山下博史監督(39)によると、部員数は例年10人前後で、就任以来、ベンチ入りメンバー(夏の大会で20人)がそろつたことは一度もないという。

町の人口は1万7478人(昨年3月末現在)と、1962年の2万9650人から減少傾向が続く。山下監督は「今後さらに過疎化が進むと、町から高校野球が消える可能性もある」と懸念する。親交のある町職員も危機感を抱いていたことから、町事業の一環として地元の子どもたちのための野球教室が企画された。

昨年2月のイベントでは同校野球部員が講師となり、素手で楽しめる専用球「ゆうボール」を使ったキヤッチボールのほか、ボールを数字的に当てて楽しむ部員手作りの「ストラッカウト」などを用意。今年はコロナ禍で中止となつたが、これまでに地元の園児や小学生ら約70人が参加した。町の担当者は「コロナの状況次第だが、今後も子どもたちに野球に親しんでもらえるよう教室を続けていきたい」と話す。

昨年参加した同校の永井駿亮主将(3年)は「小さい子と目線を合わせることと優しい言葉遣いを心がけた。野球をしたことない子どもたちが楽しそうにしているのがうれしかった」。一方、「野球教室では選手たちが得たものも大きかった」と山下監督。園児の動作や1球1球に、部員たちが真剣に向き合う姿が印象的で、自分たちが子どもたちの頃に感じていた野球の楽しさにもう一度気づかされたように見えたという。

山下監督は「参加している子どもたちの年齢が低いので、野球人口の減少防止につながるかはまだわからない」とした上で、「イベントをきっかけに、将来内海高校で野球をしたいという子どもたちが増えてくれれば」と期待する。

◇

日本高野連や朝日新聞社などは野球の持続的な発展を目指し、普及や育成、けが予防などに取り組む「高校野球2000年構想」を18年から実施している。競技

高校球児が減っている。日本高校野球連盟による高校球児が減っている。

日本高校野球連盟による高校球児が減っている。

## 高校野球のこれから

上

### 競技人口減

### 内海高部員が児童ら指導

なる。  
① ②

全国最多の179チームが出場し、7月3日に夏の大会が開幕する愛知県も例外ではない。日本高野連によると、県内の硬式部員数が外ではない。日本高野連によると、県内の硬式部員数

も14万人を割った。最も多く減少傾向が続き、昨年7月末時点では7381人となつた。

7月末時点では7381人合チームとして活動する高校の増加が予想される。

年生が引退し、1、2年生だけとなる今秋以降、部員

が計10人以下となる学校は31校の見込み。今後、名古屋・尾張両地区を中心に連

マネジャー2人を含めて12人。同町出身で今年で就任7年目の山下博史監督(39)によると、部員数は例年10人前後で、就任以来、ベンチ入りメンバー(夏の大会で20人)がそろつたことは一度もないという。

町の人口は1万7478人(昨年3月末現在)と、1962年の2万9650人から減少傾向が続く。山下監督は「今後さらに過疎化が進むと、町から高校野球が消える可能性もある」と懸念する。親交のある町職員も危機感を抱いていたことから、町事業の一環として地元の子どもたちのための野球教室が企画された。

昨年2月のイベントでは同校野球部員が講師となり、素手で楽しめる専用球「ゆうボール」を使つたキヤッチボールのほか、ボールを数字的に当てて楽しむ部員手作りの「ストラッカウト」などを用意。今後もコロナ禍で中止となつたが、これまでに地元の園児や小学生ら約70人が参加した。町の担当者は「コロナの状況次第だが、今後も子どもたちに野球に親しんでもらえるよう教室を続けたい」と話す。

昨年参加した同校の永井駿亮主将(3年)は「小さい子と目線を合わせることと優しい言葉遣いを心がけた。野球をしたことない子どもたちが樂しそうにしているのがうれしかった」。一方、「野球教室では選手たちが得たものも大きかった」と山下監督。園児の動作や1球1球に、部員たちが真剣に向き合う姿が印象的で、自分たちが子どもたちと一緒に感じていた野球の楽しさにもう一度気づかされたように見えたという。

山下監督は「参加している子どもたちの年齢が低いので、野球人口の減少防止につながるかはまだわからない」とした上で、「イベントをきっかけに、将来内海高校で野球をしたいといふ子どもたちが増えてくれれば」と期待する。

駿亮主将(3年)は「小さ

い子と目線を合わせること

と優しい言葉遣いを心がけた。野球をしたことない子どもたちが樂しそうにしているのがうれしかった」。

一方、「野球教室では選

手たちが得たものも大きか

った」と山下監督。

園児の

動作や1球1球に、部員た

ちが真剣に向き合う姿が印

象的で、自分たちが子ども

たちの頃に感じていた野球の樂

しさにもう一度気づかされ

たように見えたという。

山下監督は「参加してい

る子どもたちの年齢が低い

ので、野球人口の減少防止

につながるかはまだわから

ない」とした上で、「イベ

ントをきっかけに、将来内

海高校で野球をしたいとい

う子どもたちが増えてくれ

れば」と期待する。

◇

日本高野連や朝日新聞社などは野球の持続的な発展

を目標し、普及や育成、け

が予防などに取り組む「高

校野球2000年構想」を18

年から実施している。競技

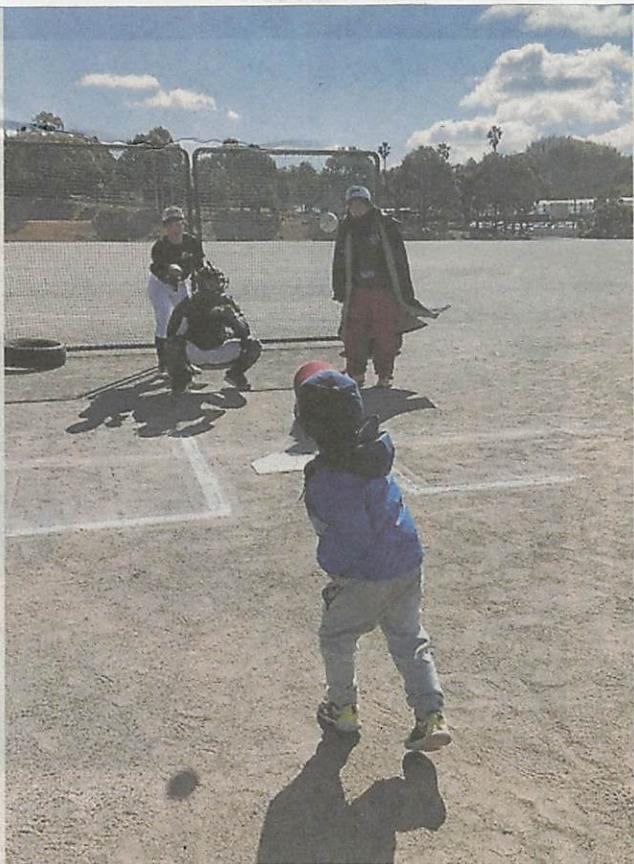
人口が減るなか、高校野球

を次世代につなげるには何

を探つた。

(この連載は仲川明里)

(が担当します)



# 未来の球児に魅力伝える

## 高校野球のこれから

上

### 競技人口減

### 内海高部員が児童ら指導

なる。

⑩ ⑪

全国最多の179チーム

が出現し、7月3日に夏の

大会が開幕する愛知県も例

外ではない。日本高野連に

よると、県内の硬式部員数

も14年の8711人をピー

クに減少傾向が続き、昨年

7月末時点では7381人

だけとなる今秋以降、部員

が計10人以下となる学校は

31校の見込み。今後、名古

屋、尾張両地区を中心に連

続チームとして活動する高

年生が引退し、1、2年生

となつた。

立ち始めた。今年の愛知大  
会に出場する連合チームは  
昨年と同じ四つだが、「春  
日井商・日進・守山・山  
田」(名古屋地区)は過去  
最多の4校で構成する。3こうした状況の中、県内  
では、自治体と地元の高校  
が手を組んで野球人口の減  
少に歯止めをかけようと模  
索する動きが出ている。人から減少傾向が続く。山  
下監督は「今後さらに過疎  
化が進むと、町から高校野  
球が消える可能性もある」  
と懸念する。親交のある町  
職員も危機感を抱いていた  
ことから、町事業の一環と  
して地元の子どもたちのため  
の野球教室が企画された。山下監督は「参加してい  
る子どもたちの年齢が低い  
ので、野球人口の減少防止  
につながるかはまだわから  
ない」とした上で、「イベ  
ントをきっかけに、将来内  
海高校で野球をしたいとい  
う子どもたちが増えてくれ  
れば」と期待する。

▲昨年2月に開かれたグラウンド  
キャッチボール教室。内海高校の  
野球部員が講師を務めた

「親子でグラウンドキャッチボール教室」  
の認定証=いずれも山下博史監督提供

### 認定証

様

あなたへの記録  
つよさ (ボールの速さ)  
あきずな (ボール往復)

時速	わざ	結果
80km/h	(コントロール)	△
25秒間で	はやさ	△
	(走るスピード)	○

南知多町にある唯一の高  
校、県立内海高校では19年  
から年に一度、町と協力し  
て「親子でグラウンドキャ  
ッチボール教室」を開催し  
ている。同校の野球部員は

昨年2月のイベントでは  
同校野球部員が講師とな  
り、素手で楽しめる専用球  
「ゆうボール」を使ったキ  
ャッチボールのほか、ボ  
ルを数字的に当てて楽し  
む部員手作りの「ストラッ  
クアウト」などを用意。今  
年はコロナ禍で中止となっ  
たが、これまでに地元の園  
児や小学生ら約70人が参加  
した。町の担当者は「コロ  
ナの状況次第だが、今後も  
子どもたちに野球に親しん  
だりえるよう教室を続け  
ていきたい」と話す。

▲昨年参加した同校の永井

(この連載は仲川明里  
が担当します)



「親子でグラウンドキャッチボール教室」  
の認定証=いずれも山下博史監督提供

マネジャー2人を含めて12  
人。同町出身で今年で就任  
7年目の山下博史監督(39)  
によると、部員数は例年10  
人前後で、就任以来、ベン  
チ入りメンバー(夏の大会  
で20人)がそろつたことは  
一度もないという。町の人口は1万7478  
人(昨年3月末現在)と、1962年の2万9650  
人から減少傾向が続く。山  
下監督は「今後さらに過疎  
化が進むと、町から高校野  
球が消える可能性もある」  
と懸念する。親交のある町  
職員も危機感を抱いていた  
ことから、町事業の一環と  
して地元の子どもたちのため  
の野球教室が企画され  
た。山下監督は「参加してい  
る子どもたちの年齢が低い  
ので、野球人口の減少防止  
につながるかはまだわから  
ない」とした上で、「イベ  
ントをきっかけに、将来内  
海高校で野球をしたいとい  
う子どもたちが増えてくれ  
れば」と期待する。

日本高野連や朝日新聞社  
などは野球の持続的な発展  
を目指し、普及や育成、け  
が予防などに取り組む「高  
校野球2000年構想」を18  
年から実施している。競技  
人口が減るなか、高校野球  
を次世代につなげるには何  
が必要なのか。愛知から高  
校野球の持続可能なあり方  
を探った。

子どもの状況次第だが、今後も  
子どもたちに野球に親しん  
だりえるよう教室を続け  
たい」と話す。

▲昨年参加した同校の永井